

山川みやえ先生のプロフィールと研修会参加者の皆様へのメッセージ【講演要旨】



2001 年大阪大学医学部保健学科卒業、大阪府警察本部保健師、大阪大学大学院医学系研究科老年看護学助手を経て、2013 年より同准教授。2017 年より The Japan Centre for Evidence Based Practice, Director を務める。また、公益財団法人浅香山病院臨床研修部門特任部長として老年期を中心とした認知症ケアに ICT を取り入れた研究や現任教育活動等を行い、認知症者の生活に注目したサポートシステム構築について、他分野の研究者や実践家と協働しながら進めている。

講演要旨

認知症は不思議な病気だ。今現在、認知症という病気を知らない者はいないくらいありふれたものになっている。しかし、認知症の説明をしてくださいというと、「もの忘れある人？」「徘徊とかで大変になるから」「進行すると施設に…」というような「イメージ」で話されていることが多い。しかし、様々な「イメージ」のために、認知症は「社会の病気」になってしまっている。2019 年に策定された認知症推進大綱では、認知症はだれもがなりうるものであり、認知症になっても希望を持って日常生活を過ごせる社会を目指し、認知症の人や家族の視点を重視しながら、尊厳と希望を持って認知症とともに生きることが明記されている。進行性の病気の過程で尊厳と希望をどのようにもたらせばよいのかは言葉で言うことは簡単であるが、実際は本当に難しい。

私は、これまでたくさんの認知症者とその家族と話している中で、「時間がない」ということが分かった。

病気のために、期せずして今まで思い描いてたようなそれまでの生活の継続が難しい時、人はどう死にたいかよりも先にどうやって生きていこうかと考えるものである。認知症の人の生活を支えるには、介護保険制度を中心に成り立っている日本の体制の中では、多職種で協働していかないと始まらない。それぞれの職種がどのように本人と家族の想いを汲んで自分の具体的な実践につなげているかを知った上で、自分は一体何ができるのかを想像してほしい。20 年近く認知症のことを研究してきて、認知症の人の生活がなおさらわからなくなっているが、今回のお話しさせていく中で、皆様と一人一人の生活を大事にするためのヒントを考えられれば幸いである。